

世界初の海上三脚灯台

御前岩灯台

ごぜんいわとうだい

海との戦いを乗り越えた努力と技術



明治18年から昭和33年までで150隻以上が遭難

御前崎灯台の東方3kmにある御前岩は、東西150m、南北1,100mにもおよぶ暗礁群があり、この中で大根、ドイ根、傘島、赤島などと呼ばれる露出岩が干潮時には波頭の中にチラホラ見られます。

この地点はちょうど、名古屋港、清水港、四日市港を結ぶ重要航路の変針点に当たり、また御前崎の海岸と暗礁の中間水路は、中小型船舶の航路でこれまで海難事故が絶えませんでした。

明治18年(1885)から昭和33年(1958)までの海難記録によると、150隻余の船が暗礁に乗り上げ多くの犠牲者を出しています。



御前岩に座礁した機名丸(約1万トン)



昭和31年海上保安庁の発案で、調査・研究・建設へ

御前岩灯標は、付近を航行する船舶に危険海域であることを知らせる事を目的に建設されました。完成した灯標を海岸側から臨むと、真っ青な海原にくっきり白い姿を浮かべています。

建設にあたり、昭和31年(1956)海上保安庁灯台部工務課長の発案により東大工学部教授など多数の権威者による専門的な調査・研究がされました。本体は運輸省第二建設港湾局で設計製作し、これを清水港に於いて組み立て、海上輸送により昭和32年(1957)6月17日に建設地点への据付を完了しました。重量60トンとされたこの三脚の据付には30トン吊り起重機2隻が活動し、多くの危険と海象を克服しての作業が行われました。

御前岩灯台の概要

位置と工事の概要
位置:北緯34度35分51秒 東経138度15分38秒
御前崎灯台の東方約3.2km

据付:昭和32年6月17日
完成:昭和33年4月20日

完成当時 昭和49年御前崎町発行「海を守る聖火」より
塗装・構造 白色、塔形(鉄造)
灯質 群せん白光 毎3秒隔て2秒間に2せん光
光度 1,700カンデラ
光達距離 13.5海里(約25km)
明弧 全度
高さ 平均水面から灯火まで19m
レンズ 5等レンズ
光源 アセチレンガス
監視 御前崎航路標識事務所職員

現在 清水海上保安部提供数値/令和3年2月8日現在
塗装・構造 白色、塔形(鉄造)
灯質 群せん白光 毎8秒に2せん光
光度 実効光度390カンデラ
光達距離 7.5海里(約14km)
明弧 全度
高さ 平均水面から灯火まで18m
レンズ -
光源 LED
監視 機器監視



鉄骨製外径1.5m(内径1.2m)長さ18mの中空円筒3本はあらかじめ潜水夫によって平らにならされた岩盤上に据えられ、脚の内径の空洞から鉄杭が打ち込まれた後、特殊なコンクリートを流し込み、三脚は見事に安座しました。さらにこの脚に足がらみのコンクリートを打って安全を期し、この上に高さ9.35mの灯標を乗せて完成しました。



海上輸送され脚柱

荒波に打ち勝った先人たちの知恵と努力

灯光にはアセトンガス60kgボンベ6本を使用し、昭和33年(1958)4月20日に完成しました。総工費4,268万円。灯標取付中は海が荒れ、船が近寄れないため作業員は9日間もこの灯標の中に立てこもり、食糧はロープを投げて引き上げながら工事を続けたという逸話も残っています。

また、考案者が御前岩灯標建設の研究論文により工学博士号を取得している事実からも、この工事がいかに画期的なものであり、かつ技術的にも困難を極めたものだったかがわかります。

(昭和33年11月30日御前崎町発行 広報御前崎より引用)

御前岩灯標の設置によって暗礁に乗り上げる事故はなくなりました。名称は平成25年10月1日から「御前岩灯台」に変更されました。

御前崎灯台を守る会 監修 2021年作成